研究（原著）

COVID-19 流行下の乳幼児の父親とその家庭内の不適切な養育　JACSIS 研究

野村　智実[1)]，帯包エリカ[2)]，加藤　承彦[3)]，田淵　貴大[4)]

〔論文要旨〕

乳幼児への不適切な養育を防ぐことは，子どもの健やかな成長発達を促進する上で重要である。また，父親の不適切な養育の実状を理解し，父親に適した支援を検討することで，家庭全体の不適切な養育の抑制に寄与する可能性がある。本研究では，住民の生活・健康・社会・経済活動の実態に関する調査を行った JACSIS 研究の 3 年間のデータを用いて，乳幼児をもつ父親とその家庭内における不適切な養育の動向を明らかにすることを目的とした。対象は，末子が 0～5 歳の父親とした。評価項目として，属性，就労状況，父親による不適切な養育（子どもに暴力をふるった等の 3 項目）と，家庭内で行われた不適切な養育（からだを叩く等の 6 項目）を用いた。対象となった父親は 2,885 人で，2020 年 4～5 月，2021 年 9～10 月，2022 年 9～10 月に行われた父親による不適切な養育の中では，「子どもに暴言を吐いた」が 10% 前後と最も多かった。また，家庭内で行われた不適切な養育では，「大声で叱る」が 59.1% と最も多かった。本研究の結果から，6% 前後の父親が何らかの不適切な養育をしていたことが明らかとなった。先行研究では，子どもの年齢が低い場合や，親が育児ストレスや困難感を抱える場合，不適切な養育に至るリスクが高いことが示されている。よって，父親の負担感やストレスを軽減するよう支援することで，不適切な養育の予防につながることが期待される。

Key words：乳幼児，父親，不適切な養育，新型コロナウイルス感染症

Ⅰ．目　　的

子どもの面前で夫婦喧嘩をする等の不適切な養育は，子どもの身体面，精神面，社会面の発達や健康にさまざまな悪影響を与え，長期にわたってその影響が続く可能性がある。実際，不適切な養育を受けた子どもは，健康問題や学業不振等を呈しやすく[1,2)]，成人以降にもうつ病を発症するリスクが高い等の知見が集積されている[3)]。また，不適切な養育は，児童虐待や子どもの死亡原因へと発展する場合もあり，早期の予防が求められる。

世界保健機関では，子どもに対するあらゆる種類の虐待，ネグレクト，怠慢，搾取を不適切な養育としており[4)]，それらは父親・母親によって行われることが多い。アメリカでは，不適切な養育の 76.8% が親によって行われ[5)]，国内でも 2021 年度の児童虐待の加害者は，47.5% が母親，41.5% が父親とされていた[6)]。また，2000 年頃より父親の不適切な養育に対する社会的関心が高まり，国内外で複数の報告がみられるようになった。例えば，生後 4 か月の乳幼児健康診査の対象児をもつ父親 1,563 人への郵送調査によると，父親の約 24% が乳児に感情的な言葉を発していたことや[7)]，生後 2 か月児をもつ父親 270 人を対象とした対面・郵送による質問紙調査で，父親の約 8% が乳児を叩いて

Child Maltreatment among Fathers of Young Children and Their Families: The JACSIS Study　〔JCH-24-018〕
受付 24. 6.17
採用 25. 2.25
Satomi Nomura, Erika Obikane, Tsuguhiko Kato, Takahiro Tabuchi
1）国立国際医療研究センター国立看護大学校小児看護学（看護師）
2）国立成育医療研究センター社会医学研究部（医師（小児科））
3）国立成育医療研究センター社会医学研究部（その他）
4）東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野（医師（公衆衛生学））

Presented by Medical*Online

いたことが報告されている[8]。さらに国外では，幼児期から子どもを叩く父親は，その後虐待の加害者となるリスクが高いことや[9]，幼少期に体罰を受けた父親は，子どもを罰する適切な手段として，体罰を容認する傾向があること等が報告されている[10]。しかしながら，父親の不適切な養育に関する報告は，母親と比較して圧倒的に少なく，その知見は十分とはいえない。特に，一般的にも子育てに重点的な支援を必要とする，乳幼児をもつ父親に関する研究は限られる。乳幼児は，他の発達段階の子どもよりも不適切な養育を受ける子どもの割合が高く，虐待による死亡者数も最多となっている[6]。そのため，乳幼児を育てる父親が，子どもと適切な関わりをもてるよう支援することは，乳幼児を守り，健やかな成長・発達を促進する上で重要である。親による不適切な養育を防ぐため，「成育過程にある者及びその保護者並びに妊産婦に対し必要な成育医療等を切れ目なく提供するための施策の総合的な推進に関する法律」に基づいた子育て支援の強化や[11]，乳児家庭全戸訪問事業による子育て環境の整備等[12]，行政を中心に妊娠期から子育て期にかけて，切れ目のない支援が展開されている。一方で，施策の多くが母親を主たる被支援者としており，父親への対応は不足している。親の不適切な養育は，家庭環境の悪化につながることからも[13]，乳幼児をもつ父親やその家庭内の不適切な養育の実状を理解し，父親に適した支援を検討することは，家庭全体の不適切な養育の抑制に寄与する可能性がある。そこで本研究では，国内で行われたインターネットコホート調査である「日本における COVID-19*問題による社会・健康格差評価研究（The Japan COVID-19 and Society Internet Survey；JACSIS study：JACSIS 研究）」のデータを用いて，乳幼児をもつ父親とその家庭内における不適切な養育の動向を明らかにすることを目的とした。

*COVID-19（Coronavirus disease 2019）：新型コロナウイルス感染症

Ⅱ．対象と方法

1．対象データ

JACSIS 研究の 2020 年 8～9 月，2021 年 9～10 月，2022 年 9 月～10 月に実施された調査データを用いた。JACSIS 研究は，COVID-19 問題を含めた住民の生活・健康・社会・経済活動の実態に関する調査を実施し，データ分析を行い，科学的根拠に基づいた「住民の健康と社会活動を守る」ための現実的な社会経済的救済策や健康増進策の立案につながる情報提供を行うことを目的とした，インターネットコホート調査である（https://jacsis-study.jp/）。JACSIS 研究の対象は，インターネット調査会社に登録する，15～79 歳の男女約 3 万人で，日本の人口構成に準じた対象を選定するよう，性別，年齢，都道府県別にランダムサンプリングが行われている。本研究では，JACSIS 研究が多様な発達段階の子どもをもつ父親を対象に含み，十分なサンプルサイズが得られることや，父親の不適切な行動に関する項目が縦断的に調査されていることから，研究目的である乳幼児をもつ父親とその家庭内の不適切な養育行動の動向を明らかにすることが可能と考え，JACSIS 研究のデータを用いた。本研究は，研究の総括・データ管理を担当した主機関である大阪国際がんセンター倫理委員会の承認（20084）を受け，その後，解析担当者の所属機関である国立国際医療研究センターの実施許可（K17）を得た上で研究を実施した。なお，著者の田淵貴大は JACSIS 研究の総括を行う研究代表者，野村智実，帯包エリカ，加藤承彦は JACSIS 研究のデータを用いて，児童虐待に関する分析・考察を担当した共同研究者である。

本研究では，Hulley et al（2014）の記述的研究におけるサンプルサイズの算出方法に基づき[14]，サンプルサイズを以下の計算式を用いて手計算にて算出した。

$N = 4Z\alpha^2P(1-P) \div W^2$（$Z\alpha$：信頼水準が（1-$\alpha$）の時の両側 α に対する標準正規偏差で，信頼水準が 95%（$\alpha = 0.05$）の時，$Z\alpha = 1.96$ となる，P：期待割合，W：信頼区間の幅）

先行研究を参考に[7,8]，乳幼児に不適切な養育を行ったと回答する研究対象者の期待割合を 0.184～0.281 と見積もり，信頼区間の幅 0.10，信頼水準 95% としてサンプルサイズを算出したところ，割合の推定に必要なサンプルサイズは 230.5～310.5 人であった。JACSIS 研究には 310.5 人以上の研究対象者が含まれていたため，父親の実状を推定値よりも正確にとらえることが可能と考え，全ての研究対象者を分析に含めることとした。なお，本研究では児童福祉法に則り，0～5 歳の未就学の子どもを乳幼児と定義した。

JACSIS 研究には「次の選択肢のなかから，下から 2 番目を選択してください」という項目が設定されており，指定した回答以外を選択した場合，不正回答とされる[15]。本研究では不正回答者を除き，子どもがい

Presented by Medical*Online

る男性のうち，家庭内に乳幼児が少なくとも1人いる者を選定するため，子どもがいる，男性，末子の年齢が0〜5歳を選定条件とした。また，親の年齢は児童虐待との関連が認められることから[16]，親の年齢による結果の偏りを避けるため，18歳未満で子どもをもった若年の父親と，51歳以上で子どもをもった高齢の父親を除外し，本研究の対象となる乳幼児を18〜50歳でもった父親から得られたデータを対象とした（**図1**）。

2. 評価項目

JACSIS研究では，生活，健康，社会的活動，子どもへの不適切な養育，育児時間，小児期の逆境体験，家庭への満足感等，多様な項目が評価されている。その中で本研究では，属性，就労状況，子どもへの不適切な養育を評価項目として選定した。

i. 属性

属性には年齢，最終学歴，配偶者の有無，家族構成，世帯内の子どもの人数，世帯年収，居住地域（都道府県），末子の年齢と性別を用いた。

ii. 就労状況

就労状況には就労の有無，勤務形態，主たる業務内容（「主にデスクワーク」「主に人と話したりする仕事」「主に体を使う仕事」より選択）を用いた。

iii. 子どもへの不適切な養育

子どもへの不適切な養育には，父親による不適切な養育と，家庭内で行われた不適切な養育に該当する項目を用いた。

父親による不適切な養育として，2020〜2022年調査時に回答者である父親自身が行った，「子どもに暴力をふるった」「子どもに食べさせられないことがあった」「子どもに暴言を吐いた」について，それぞれ「あった」「なかった」「わからない」「該当しない/答えたくない」より回答を得た。なお，2020年調査時は，緊急事態宣言の期間（2020年4〜5月ごろ）の，2021年・2022年調査は最近2か月間の不適切な養育を問うた。また，不適切な養育の項目は，回答者と子どもの生活状況に関する質問の一部として設定したが，2020年調査のみ，生活状況に「入学式・入園式が中止になった」等，全ての回答者に該当しない項目を含んでいたため，選択肢に「該当しない」を設定した。

家庭内で行われた不適切な養育として，2020年調査時に家庭内のいずれかの人が子どもに行った，「からだ（尻・手・頭・顔など）を叩く」「子どもをなぐる」「子どもに食事を与えない」「夜間，子どもだけ残して外出する」「大声で叱る」「子どもを無視する」について，それぞれ「しばしばある」から「まったくない」の4件法にて回答を得た。

不適切な養育に関連する質問項目を表示する際，0〜14歳の子どもが複数いる父親には，回答の優先順位を小学生（高学年），小学生（低学年），中学生，高校生，幼稚園児・保育園児，大学生，その他と提示し，優先順位の高い子どもについて回答を得た。

3. 分析方法

調査年ごとに記述統計量を算出した。父親の不適切な養育については，末子の年齢ごとにも記述統計量を算出した。カイ二乗検定を用いてボンフェローニ法による調整の上，父親による不適切な養育に関する3年間の回答の比較を行った。また，家庭内で行われた不適切な養育と属性（親の年齢，末子の年齢，学歴，世帯年収）間の関連を，スピアマンの順位相関係数を用いて評価した。統計解析にはIBM SPSS Statisticsバージョン28.0を使用した。

4. 倫理的配慮

本研究は，大阪国際がんセンター倫理審査委員会にて承認を得た上で実施した（承認番号：20084）。

Ⅲ. 結　　果

本研究の基準を満たす父親は，2020年調査では28,000人中1,105人（3.9%），2021年調査では31,000人中1,187人（3.8%），2022年調査では32,000人中1,807人（5.6%）であった。研究対象者のうち，全ての調査に参加した父親は291人，2回の調査に参加した父親は632人，1回の調査に参加した父親は1,962人で，父親の総人数は2,885人であった（**図1**）。

1. 属性

父親の平均年齢は，2020年調査が36.8±5.9歳，2021年調査が36.9±5.7歳，2022年調査が36.6±5.2歳で，9割以上の父親には配偶者がいた（**表1**）。また，世帯内の子どもの人数は，全ての調査で1.7±0.8人であった。居住者の多かった都道府県は，東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県，愛知県，大阪府で，6都府県を合わせて2020年調査は491人（44.5%），2021年調査は542

Presented by Medical*Online

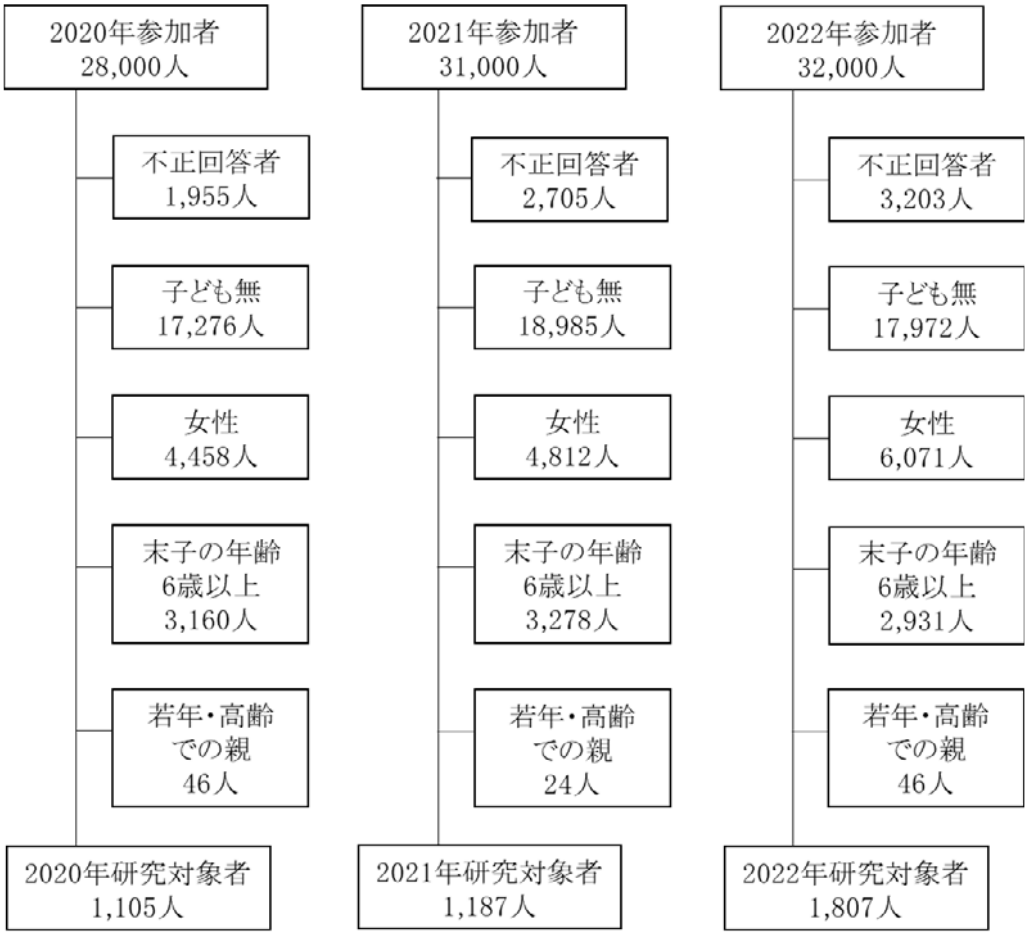

図 1　研究対象者

JACSIS 研究の参加者から，本研究の選定基準に沿って，研究対象者となる父親を選定する過程を本図にて示した。

脚注．研究対象者のうち，全ての調査に参加した父親は 769 人，2 回の調査に参加した父親は 1,202 人（2020-2021 年 426 人，2021-2022 年 639 人，2020-2022 年 137 人），1 回の調査に参加した父親は 2,577 人（2020 年 798 人，2021 年 467 人，2022 年 1,312 人）であった。

人（45.6%），2022 年調査は 874 人（48.4%）であった。

末子の年齢は，2020 年調査が 2.2±1.7 歳，2021 年調査が 2.2±1.7 歳，2022 年調査が 1.9±1.6 歳で，男女比はおよそ 1 対 1 であった（**表 1**）。

2. 就労状況

就労状況を**表 1** に示す。父親のほぼ全員が就労しており，就労している父親のうち 2020 年調査は 1,085/1,089 人(99.6%)，2021 年調査は 1,168/1,176 人(99.3%)，2022 年調査は 1,789/1,794 人（99.7%）が，フルタイムの勤務をしていた。また，主な業務内容は，デスクワークを主とする父親が 2020 年調査は 542/1,089 人（49.8%），2021 年調査は 566/1,176 人（48.1%），2022 年調査は 859/1,794 人（47.9%）と，およそ 5 割であった。

3. 子どもへの不適切な養育

「子どもに暴力をふるった」について，「あった」と回答した父親は，2020 年調査が 51/1,105 人（4.6%），2021 調査が 83/1,187 人（7.0%），2022 年調査が 94/1,807 人（5.2%）だった。「子どもに食べさせられないことがあった」について，「あった」と回答した父親は，2020 年調査が 41/1,105 人（3.7%），2021 調査が 45/1,187 人（3.8%），2022 年調査が 73/1,807 人（4.0%）だった。「子どもに暴言を吐いた」について，「あった」と回答した父親は，2020 年調査が 98/1,105 人（8.9%），2021 調査が 136/1,187 人（11.5%），2022 年調査が 180/1,807 人（10.0%）だった。つまり，父親による不適切な養育の中では，子どもへの暴言の割合が最も高かった（**表 2**）。反対に，「子どもに暴力をふるった」について，「なかった」と回答した父親は，2020 年調査が 599/1,105 人（54.2%），2021 年調査が

Presented by Medical*Online

表1 研究対象者の属性と就労状況

	2020年（n＝1,105）	2021年（n＝1,187）	2022年（n＝1,807）
	n（%）	n（%）	n（%）
配偶者			
いる	1,089（98.6）	1,172（98.7）	1,798（99.4）
家族構成			
核家族	1,024（92.7）	1,130（95.2）	1,732（95.8）
最終学歴			
中学校卒/高校卒	210（19.0）	206（17.4）	268（14.8）
専門学校卒/短期大学卒	153（13.8）	143（12.0）	244（13.5）
大学/大学院卒	740（67.0）	833（70.2）	1,284（71.0）
その他	2（ 0.2）	5（ 0.4）	11（ 0.6）
世帯年収			
300万円未満	44（ 4.0）	30（ 2.5）	56（ 3.1）
300-700万円	542（49.0）	549（46.3）	800（44.2）
700-1,000万円	300（27.1）	352（29.7）	514（28.4）
1,000万円以上	146（13.2）	168（14.2）	303（16.8）
わからない/答えたくない	73（ 6.6）	88（ 7.4）	134（ 7.4）
末子の性別			
男児	-	622（52.4）	961（53.2）
就労			
している	1,089（98.6）	1,176（99.1）	1,794（99.2）
仕事内容			
デスクワーク	542（49.0）	566（47.7）	859（47.5）
人と話したりする仕事	276（25.0）	295（24.9）	451（24.9）
体を使う仕事	271（24.5）	315（26.5）	484（26.8）

1,014/1,187人（85.4%），2022年調査が1,538/1,807人（85.1%）だった。「子どもに食べさせられないことがあった」について，「なかった」と回答した父親は，2020年調査が611/1,105人（55.3%），2021年調査が1,064/1,187人（89.6%），2022年調査が1,588/1,807人（87.8%）だった。「子どもに暴言を吐いた」について，「なかった」と回答した父親は，2020年調査が552/1,105人（50.0%），2021年調査が942/1,187人（79.4%），2022年調査が1,448/1,807人（80.1%）だった。つまり，2020年調査を除いて，80%前後の父親は，不適切な養育を「なかった」と回答していた。

2020～2022年の3年間の父親の不適切な養育を比較したところ，全ての項目で「該当しない/答えたくない」の回答のみに，有意な差があった（$p<0.01$）。末子の年齢ごとの回答状況として，2020年調査で「該当しない」を選択した父親は，子どもの年齢が低いほど多かった。また，「子どもに暴力を振るった」「子どもに暴言を吐いた」は全ての調査で，3歳以上の末子がいる父親が「あった」と回答する傾向がみられた（**表3**）。

家庭内で行われた不適切な養育を，**表4**に示す。不適切な養育のうち，「しばしばある」または「まれにある」と回答した父親の割合が高かった項目は，「からだ（尻・手・頭・顔など）を叩く」の408/1,105人（36.8%）と，「大声で叱る」の654/1,105人（59.1%）であった。一方で，「子どもに食事を与えない」の1,010/1,105人（91.3%）や，「夜間，子どもだけ残して外出する」の1,010/1,105人（91.3%）では，90%以上の父親が「まったくない」と回答していた。また，家庭内で行われた不適切な養育と属性間に，有意な関連はみられなかった（**表5**）。

Ⅳ．考　　察

JACSIS研究の3年間のデータを比較したところ，乳幼児をもつ父親による不適切な養育に顕著な差異は認められなかった。一方で，乳幼児をもつ父親とその家庭の一定数で，不適切な養育が行われている可能性が示唆された。本研究の結果は，乳幼児をもつ父親や家庭に対して，子どもへの不適切な養育を防ぐ取り組みの必要性を示すものであった。

本研究の対象となった父親の平均年齢は，全調査期間とも36歳であった。国内における子どもの出生時の父親の平均年齢は，2021年度に34.2歳であった[17]。本研究では，出生後数年にあたる幼児をもつ父親を対

Presented by Medical*Online

表 2　父親による子どもへの不適切な養育

	2020 年（n = 1,105）	2021 年（n = 1,187）	2022 年（n = 1,807）
	n（%）	n（%）	n（%）
子どもに暴力をふるった			
あった	51（ 4.6）	83（ 7.0）	94（ 5.2）
なかった	599（54.2）	1,014（85.4）	1,538（85.1）
わからない	58（ 5.2）	64（ 5.4）	116（ 6.4）
該当しない	397（35.9）	—	—
答えたくない	—	26（2.2）	59（3.3）
子どもに食べさせられないことがあった			
あった	41（ 3.7）	45（ 3.8）	73（ 4.0）
なかった	611（55.3）	1,064（89.6）	1,588（87.8）
わからない	54（ 4.9）	52（ 4.4）	103（ 5.7）
該当しない	399（36.1）	—	—
答えたくない	—	26（2.2）	43（2.4）
子どもに暴言を吐いた			
あった	98（ 8.9）	136（11.5）	180（10.0）
なかった	552（50.0）	942（79.4）	1,448（80.1）
わからない	60（ 5.4）	80（ 6.7）	124（ 6.9）
該当しない	395（35.7）	—	—
答えたくない	—	29（2.4）	55（3.0）

象としていることから，平均的な年齢層の父親といえる。また，父子家庭は 2020 年調査が 16/1,105 人（1.4%），2021 年調査が 15/1,187 人（1.3%），2022 年調査が 9/1,807 人（0.6%）と，全期間 1% 程度で，全国の父子家庭の割合の 0.7% とほぼ同程度であった[18]。核家族の割合は，2020 年調査が 1,024/1,105 人（92.7%），2021 年調査が 1,130/1,187 人（95.2%），2022 年調査が 1,732/1,807 人（95.8%）であり，国内の平均が 84.2% であるのに対し[18]，本研究の方が高くなっていた。親と子どものみの世帯は都市部に多く[18]，本研究でも都市部に居住する父親が多かったことが，核家族が多かった理由と考えられる。居住地域は子どもの出生割合とも関連しており，2020 年の都道府県別出生割合は，東京都，大阪府，神奈川県，愛知県，埼玉県の順に高かった[19]。これは，本研究の居住者数が多かった地域と一致していた。父親の属性には，日本の乳幼児をもつ父親の属性との大きな差異はみられないため，本研究は一般的な父親を対象としていると考える。

何らかの不適切な養育を行ったことがあると回答した父親の割合は，6% 前後であった。これは，アメリカ合衆国保健福祉省が行っている児童虐待・ネグレクトの年次調査で報告された被虐待児の割合（人口 1,000 人あたり 8.7 人）や[5]，国内の児童相談所における児童虐待相談の対応件数の中で人口比が最も高かった都道府県（人口 1,000 人あたり 10.9 人）と比較して[20]，大きな差異はなかった。一方，COVID-19 流行以前に行われた研究では，約 28% の父親が何らかの虐待的な子育てをしており[7]，それと比して父親による不適切な養育は少なかったといえる。本研究は COVID-19 流行下に行った調査を用いており，同時期に父親は育児ストレスの顕著な上昇等，子育てに伴う困難を経験し[21]，平時以上に不適切な養育が起こりやすい状況にあったにもかかわらず，大半の父親が不適切な養育を行っていなかった。先行研究によると，10 代の子どもによる自己評価でも，COVID-19 流行前後の虐待の発生状況に大きな変化はなく，虐待を受けたことを報告した子どもは数%であった[22]。子どもの年齢層は異なるものの，不適切な養育に関する子どもと父親の評価に大きな差はなく，父親による不適切な養育は実際に少なかった可能性が高いといえる。調査時期はテレワークの導入等により，父子の関わりが増えた時期でもある。父親が子どもと日常的に関わることは，父親の不適切な養育を抑制することが報告されている[23]。本研究でも，父親の生活の変化が不適切な養育の抑制に寄与した可能性が示唆された。ただし，父親の不適切な養育に対する保護因子については，世界的にも研究が限られているため，今後さらなる検証が必要である。なお，2020 年調査に「該当しない」と回答した父親が突出して多かった背景には，子どもに対する父親の認識が関わっていることが推測される。例えば，

Presented by Medical*Online

表3　父親による子どもへの不適切な養育と末子の年齢

	2020年（n＝1,105）						2021年（n＝1,187）						2022年（n＝1,807）					
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
	n（%）						*n*（%）						*n*（%）					
子どもに暴力をふるった																		
あった	7 (3.1)	12 (5.0)	7 (3.7)	7 (4.2)	7 (5.1)	11 (7.4)	14 (5.6)	15 (5.8)	13 (6.8)	15 (8.8)	11 (6.7)	15 (9.9)	12 (3.1)	26 (5.4)	20 (5.7)	13 (5.6)	10 (5.7)	13 (7.4)
なかった	96 (42.1)	114 (47.9)	108 (57.4)	102 (61.4)	85 (62.0)	94 (63.5)	216 (85.7)	224 (87.2)	163 (85.8)	143 (83.6)	145 (87.9)	123 (80.9)	348 (88.8)	412 (85.8)	297 (84.1)	192 (83.1)	143 (81.7)	146 (83.0)
わからない	8 (3.5)	9 (3.8)	11 (5.9)	10 (6.0)	11 (8.0)	9 (6.1)	15 (6.0)	12 (4.7)	9 (4.7)	10 (5.8)	8 (4.8)	10 (6.6)	23 (5.9)	27 (5.6)	21 (5.9)	18 (7.8)	15 (8.6)	12 (6.8)
該当しない	117 (51.3)	103 (43.3)	62 (33.0)	47 (28.3)	34 (24.8)	34 (23.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
答えたくない	—	—	—	—	—	—	7 (2.8)	6 (2.3)	5 (2.6)	3 (1.8)	1 (0.6)	4 (2.6)	9 (2.3)	15 (3.1)	15 (4.2)	8 (3.5)	7 (4.0)	5 (2.8)
子どもに食べさせられないことがあった																		
あった	6 (2.6)	10 (4.2)	6 (3.2)	6 (3.6)	5 (3.6)	8 (5.4)	8 (3.2)	9 (3.5)	10 (5.3)	6 (3.5)	9 (5.5)	3 (2.0)	14 (3.6)	22 (4.6)	22 (6.2)	5 (2.2)	8 (4.6)	2 (1.1)
なかった	93 (40.8)	119 (50.0)	110 (58.5)	103 (62.0)	87 (63.5)	99 (66.9)	226 (89.7)	226 (87.9)	174 (91.6)	153 (89.5)	146 (88.5)	139 (91.4)	349 (89.0)	415 (86.5)	305 (86.4)	209 (90.5)	150 (85.7)	160 (90.9)
わからない	9 (3.9)	9 (3.8)	12 (6.4)	10 (6.0)	9 (6.6)	5 (3.4)	11 (4.4)	15 (5.8)	3 (1.6)	8 (4.7)	9 (5.5)	6 (3.9)	24 (6.1)	28 (5.8)	16 (4.5)	14 (6.1)	12 (6.9)	9 (5.1)
該当しない	120 (52.6)	100 (42.0)	60 (31.9)	47 (28.3)	36 (26.3)	36 (24.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
答えたくない	—	—	—	—	—	—	7 (2.8)	7 (2.7)	3 (1.6)	4 (2.3)	1 (0.6)	4 (2.6)	5 (1.3)	15 (3.1)	10 (2.8)	3 (1.3)	5 (2.9)	5 (2.8)
子どもに暴言を吐いた																		
あった	12 (5.3)	17 (7.1)	12 (6.4)	18 (10.8)	16 (11.7)	23 (15.5)	18 (7.1)	17 (6.6)	24 (12.6)	29 (17.0)	20 (12.1)	28 (18.4)	20 (5.1)	46 (9.6)	36 (10.2)	27 (11.7)	28 (16.0)	23 (13.1)
なかった	86 (37.7)	109 (45.8)	101 (53.7)	93 (56.0)	78 (56.9)	85 (57.4)	208 (82.5)	215 (83.7)	154 (81.1)	124 (72.5)	132 (80.0)	109 (71.7)	331 (84.4)	386 (80.4)	284 (80.5)	179 (77.5)	128 (73.1)	140 (79.5)
わからない	12 (5.3)	10 (4.2)	14 (7.4)	8 (4.8)	10 (7.3)	6 (4.1)	18 (7.1)	18 (7.0)	7 (3.7)	13 (7.6)	12 (7.3)	12 (7.9)	31 (7.9)	33 (6.9)	20 (5.7)	20 (8.7)	13 (7.4)	7 (4.0)
該当しない	118 (51.8)	102 (42.9)	61 (32.4)	47 (28.3)	33 (24.1)	34 (23.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
答えたくない	—	—	—	—	—	—	8 (3.2)	7 (2.7)	5 (2.9)	5 (2.9)	1 (0.6)	3 (2.0)	10 (2.6)	15 (3.1)	13 (3.7)	5 (2.2)	6 (3.4)	6 (3.4)

Presented by Medical*Online

表 4　家庭内で行われた子どもへの不適切な養育（n＝1,105）

		n（%）
からだ（尻・手・頭・顔など）を叩く		
	しばしばある	29（ 2.6）
	ときどきある	123（11.1）
	まれにある	256（23.1）
	まったくない	697（63.0）
子どもをなぐる		
	しばしばある	17（ 1.5）
	ときどきある	39（ 3.5）
	まれにある	78（ 7.1）
	まったくない	971（87.8）
子どもに食事を与えない		
	しばしばある	18（ 1.6）
	ときどきある	32（ 2.9）
	まれにある	45（ 4.1）
	まったくない	1,010（91.3）
夜間，子どもだけ残して外出する		
	しばしばある	15（ 1.4）
	ときどきある	32（ 2.9）
	まれにある	48（ 4.3）
	まったくない	1,010（91.3）
大声で叱る		
	しばしばある	75（ 6.8）
	ときどきある	239（21.6）
	まれにある	340（30.7）
	まったくない	451（40.8）
子どもを無視する		
	しばしばある	18（ 1.6）
	ときどきある	41（ 3.7）
	まれにある	109（ 9.9）
	まったくない	937（84.7）

表 5　家庭内で行われた子どもへの不適切な養育と属性間の関連

	父親の年齢	末子の年齢	学歴	世帯年収
からだ（尻・手・頭・顔など）を叩く	0.01	0.01	−0.44	0.07
子どもをなぐる	−0.00	−0.03	0.15	0.01
子どもに食事を与えない	0.01	−0.01	0.15	0.07
夜間，子どもだけ残して外出する	0.01	−0.03	0.15	0.06
大声で叱る	0.03	−0.00	−0.22	−0.01
子どもを無視する	0.02	0.01	−0.19	−0.02

スピアマンの順位相関係数

言語的な理解がまだできない乳幼児に対して，暴言を用いることを適当でないと考えた場合，「該当しない」を選択する可能性がある。実際，年齢の低い父親ほど，「該当しない」を選択していた。もしくは，「ない」と「該当しない/答えたくない」の回答者の割合が 3 年間でほぼ変わらないことから，2020 年調査時は不適切な養育をしていない父親の一定数が，「該当しない」を選択していた可能性がある。いずれにせよ，本研究の結果のみでその理由を明確化することは困難である。

全体的な割合は低いものの，一定数の父親が子どもに不適切な養育を行っており，特に子どもへの暴言を用いた父親は，2020 年調査が 98/1,105 人（8.9%），2021 調査が 136/1,187 人（11.5%），2022 年調査が 180/1,807 人（10.0）%と，他の不適切な養育より割合が高かった。先行研究では，父親による虐待的な子育てのうち，子どもに感情的な言葉を用いることが最も多く[7]，本研究でも類似した結果が得られた。日常的に子どもに対して感情的な言葉を発している親は，子どもへの対

Presented by Medical*Online

応の困難さやメンタルヘルスの悪化等を有していることが示唆されており[24]，親が困り感を抱いている可能性が高い。例えば，自身の怒りを行動で示す父親は，子どもに暴言を用いる傾向があることから，父親の怒りに対する行動変容を促し，子どもへの暴言を防ぐことにつながる支援が有用であると考える。さらには，乳幼児期から不適切な養育を受けていた子どもは，その後も慢性的に不適切な養育を受ける割合が高い[25]。そのため，早い段階からの父親の不適切な養育を防ぐ支援が欠かせない。日本では国策として，妊娠期からの切れ目のない支援を展開しているが[11]，子どもの出生前や出生早期からの父親への支援は限られている。母親への妊娠期からの介入は，不適切な養育を防ぐことが明らかとなっていることからも[26]，父親へも子どもの出生前からの継続的な支援を行うことが望ましい。また，父親の不適切な養育を防ぐために，経済的支援や仕事のストレスの軽減等，父親の不適切な養育のリスク因子を改善することをはじめとした，効果的な支援の検討が必要であると考える。

家庭内で行われた不適切な養育として，父親の約4割が子どもを叩くことを，約6割が子どもを大声で叱ることを「ある」と回答していた。COVID-19の流行期に，0〜17歳児を育てる親（94%が母親）の約50%が「怒鳴る」，約10%が「平手打ち/叩く」を用いていたことや[27]，COVID-19流行以前には30%の1歳児が家族から叩かれていたことが明らかになっている[9]。これらと比較しても，本研究では父親が認識する家庭内で行われた不適切な養育の割合が高かったといえる。子どもを叩くことや大声で叱ることは，子どもの問題行動を高めることと関連があり[28]，のちに深刻な虐待へと発展するリスクがあることが示唆されている。また，本研究では，子どもの年齢や属性と家庭内で行われた不適切な養育間の関連はなかったものの，教育歴や世帯年収が低い親の方が子どもを叩く傾向があることや[29]，子どもの年齢が低いほど，親は大声を用いて子どもの行動を制御する傾向があることが報告されている[30]。一般に乳幼児をもつ親は，子育てへの労力が大きく，育児ストレスや困難感が高まりやすいことから，親への支援の必要性が高い。親が子どもを叩くことや大声で叱ることを防ぐため，親の負担感を軽減することがわかっている，継続的な家庭訪問等の支援が望ましいと考える[31]。また，子どもを大声で叱る親への効果的な支援は見当たらないものの，親の不適切な養育を予防する方法の1つとされる，親の子育てへの自信を高める介入が有用である可能性が考えられる。

本研究には，いくつかの限界がある。まず，インターネット調査会社に登録している父親のみを対象としているため，物理的に登録ができない父親等を含め，多様な背景をもつ父親全てを反映した結果は得られていない。調査に際して，父親に対象児の優先順位を提示しており，父親の回答が乳幼児以外の子どもに対するものである場合が考えられる。先行研究では，不適切な養育を受けている子どもがいる家庭では，きょうだい児も不適切な養育を受ける割合が高いことや[5]，年少児ほど不適切な養育を受ける場合が多いことが示されている[32]。その点から，本研究は乳幼児への不適切な養育の実状も反映している可能性があると考える。また，子どもへの不適切な養育は，父親の主観的評価に基づくデータを用いており，客観的な立証が不十分である。父親の不適切な養育には多様な形態があるが，本研究ではその一部のみを扱っている。将来の研究では，乳幼児への不適切な養育のさらなる理解と，乳幼児をもつ父親や家庭全体に適した不適切な養育を予防する支援方策を開発することが望まれる。

V．結　　論

JACSIS研究の3年間のデータの比較を通じて，乳幼児をもつ父親の6%前後は，不適切な養育を行っていたことが明らかとなった。父親とその家庭内で行われていた不適切な養育の中では，「子どもへの暴言」と「子どもを大声で叱る」の割合が高かった。乳幼児への不適切な養育は，子どもの健全の発達を阻害する可能性があるため，父親を対象としたプログラムの実施等，不適切な養育を防ぐ支援の必要性が示唆された。

学会発表・研究費助成

本研究は，READY FOR新型コロナウイルス感染症拡大防止活動基金（grant number 5th period 2nd term 001）の助成を受けて実施した。

利益相反

本研究に関連する開示すべき利益相反はない。

著者の役割として，大阪国際がんセンター（現：東北大学大学院）の田淵貴大は，計画立案，調査実施等，JACSIS研究の全ての行程を研究代表者として行った。国立国際医療研究センター国立看護大学校の野村智実は，JACSIS

Presented by Medical*Online

研究で得られたデータのうち，本研究に用いたデータの解析を行い，結果を解釈した。国立成育医療研究センターの帯包エリカ・加藤承彦は，データ分析の指導ならびに分析結果の解釈の妥当性に対する科学的助言を行った。野村智実が論文の骨子をまとめ，帯包エリカ・加藤承彦・田淵貴大が内容を確認の上，修正の助言をした。助言に基づき，野村智実が論文の草稿を作成し，適宜帯包エリカ・加藤承彦・田淵貴大が校閲を行った。著者全員の了承を得て，論文を投稿した。

文　献

1）Goulter N, Moretti MM, Del Casal JM, et al. Attachment insecurity accounts for the relationship between maternal and paternal maltreatment and adolescent health. Child Abuse & Neglect 2019; 96: 104090.

2）Tanaka M, Georgiades K, Boyle MH, et al. Child maltreatment and educational attainment in young adulthood: results from the Ontario Child Health Study. Journal of Interpersonal Violence 2015; 30(2): 195-214.

3）Von Cheong E, Sinnott C, Dahly D, et al. Adverse childhood experiences (ACEs) and later-life depression: perceived social support as a potential protective factor. BMJ Open 2017; 7(9): e013228.

4）World Health Organization. “Preventing child maltreatment: a guide to taking action and generating evidence”. https://www.who.int/publications/i/item/preventing-child-maltreatment-a-guide-to-taking-action-and-generating-evidence (accessed 2024.03.26)

5）The U.S. Department of Health and Human Services. “Child maltreatment 2021”. https://www.acf.hhs.gov/sites/default/files/documents/cb/cm2021.pdf (accessed 2023.12.25)

6）厚生労働省．“令和３年度　福祉行政報告例の概況”．https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/21/dl/kekka_gaiyo.pdf（参照 2023.12.25）

7）杉本昌子，横山美江．父親の虐待的子育てに関連する要因の検討．小児保健研究　2015; 74(6): 922-929.

8）Takehara K, Suto M, Kakee N, et al. Prenatal and early postnatal depression and child maltreatment among Japanese fathers. Child Abuse & Neglect 2017; 70: 231-239.

9）Lee SJ, Grogan-Kaylo A, Berger LM. Parental spanking of 1-year-old children and subsequent child protective services involvement. Child Abuse & Neglect 2014; 38(5): 875-883.

10）Wang F, Wang F, Xing X. Attitudes mediate the intergenerational transmission of corporal punishment in China. Child Abuse & Neglect 2018; 76: 34-43.

11）内閣府．“成育過程にある者及びその保護者並びに妊産婦に対し必要な成育医療等を切れ目なく提供するための施策の総合的な推進に関する法律”．https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=430AC1000000104（参照 2024.04.27）

12）厚生労働省．“乳児家庭全戸訪問事業ガイドライン”．https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/131030_03-02.pdf（参照 2023.10.30）

13）Syed S, Gilbert R, Feder G, et al. Family adversity and health characteristics associated with intimate partner violence in children and parents presenting to health care: a population-based birth cohort study in England. Lancet Public Health 2023; 8(7): e520-e534.

14）Hulley BS, Cummings SR, Browner WS, et al. 木原雅子，木原正博訳．医学的研究のデザイン　研究の質を高める疫学的アプローチ．第４版．東京：メディカル・サイエンス・インターナショナル，2014.

15）Miyawaki A, Tabuchi T, Tomata Y, et al. Association between participation in the government subsidy programme for domestic travel and symptoms indicative of COVID-19 infection in Japan: cross-sectional study. BMJ Open 2021; 11(4): e049069.

16）Conrad-Hiebner A, Stephanie W, Schoemann A, et al. The impact of child and parental age on protective factors against child maltreatment. Child & Family Social Work 2019; 24(2): 264-274.

17）総務省統計局．“年次別にみた出生数・出生率（人口千対）・出生性比及び合計特殊出生率”．https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003411595（参照 2024.04.27）

18）厚生労働省．“国民生活基本調査”．https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21kekka.html（参照 2023.09.10）

19）総務省統計局．“人口動態調査”．https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html（参照 2023.09.10）

Presented by Medical*Online

20）清水美紀.【資料】児童虐待に関する地域間比較 ――『平成 27 年度 福祉行政報告例』データの分析――. 社会保障研究 2017; 2(2-3): 279-308.
21）Taubman-Ben-Ari O, Ben-Yaakov O, Chasson M. Parenting stress among new parents before and during the COVID-19 pandemic. Child Abuse & Neglect 2021; 117: 105080.
22）Augusti EM, Myhre MC, Wentzel-Larsen T, et al. Violence and sexual abuse rates before and during the Covid-19 pandemic: A prospective population-based study on Norwegian youth. Child Abuse & Neglect 2023; 136: 106023.
23）Lee SJ, Taylor CA, Bellamy JL. Paternal depression and risk for child neglect in father-involved families of young children. Child Abuse & Neglect 2012; 36(5): 461-469.
24）Arai T, Goto A, Komatsu M, et al. Incidence of and improvement in inappropriate parental behaviors of mothers with young children: a retrospective cohort study conducted in collaboration with a local government. Archives of Public Health 2021; 79(1): 37.
25）Cowell RA, Cicchetti D, Rogosch FA, et al. Childhood maltreatment and its effect on neurocognitive functioning: timing and chronicity matter. Development and Psychopathology 2015; 27 (2): 521-533.
26）Olds DL. Preventing child maltreatment and crime with prenatal and infancy support of parents: the nurse-family partnership. Journal of Scandinavian Studies in Criminology and Crime Prevention 2008; 9 (S1): 2-24.
27）Yamaoka Y, Hosozawa M, Sampei M, et al. Abusive and positive parenting behavior in Japan during the COVID-19 pandemic under the state of emergency. Child Abuse & Neglect 2021; 120: 105212.
28）Gershoff ET, Grogan-Kaylor A, Lansford JE, et al. Parent discipline practices in an international sample: associations with child behaviors and moderation by perceived normativeness. Child Development 2010; 81(2): 487-502.
29）MacKenzie MJ, Nicklas E, Brooks-Gunn J, et al. Who spanks infants and toddlers? Evidence from the Fragile Families and Child Well-Being Study. Child Youth Serv Rev 2011; 33(8): 1364-1373.
30）Straus MA, Field CJ. Psychological aggression by American parents: national data on prevalence, chronicity, and severity. Journal of Marriage and Family 2003; 65(4): 795-808.
31）Gershoff T, Lee SJ, Durran JE. Promising intervention strategies to reduce parents' use of physical punishment. Child Abuse & Neglect 2017; 71: 9-23.
32）Witte S, Fegert JM, Walper S. Risk of maltreatment for siblings: Factors associated with similar and different childhood experiences in a dyadic sample of adult siblings. Child Abuse & Neglect 2018; 76: 321-333.

Presented by Medical*Online

〔Summary〕

Preventing parents from maltreating their children and supporting parent-child relationships is crucial for the healthy growth and development of infants and children. Understanding actual paternal-child maltreatment and providing suitable support may help in preventing child maltreatment in the family. Therefore, this study aimed to clarify trends in child maltreatment by fathers and other family members using data from the JACSIS study, an internet cohort study, for the period 2020, 2021, and 2022. This study comprised data obtained from fathers with children aged 0-5 years. Data regarding sociodemographic information, employment status, paternal child maltreatment (three items, e.g., violence against their children), and child maltreatment in the home (six items, e.g., spanking children's body) were used as the evaluation items of this study. The study included 2,885 fathers. Approximately 10% of fathers admitted to using abusive language toward their children, and this rate was the highest among paternal child maltreatment cases. Moreover, 59.1% of fathers reported that their children were yelled at by family members, making it the most prevalent form of child maltreatment in the home. Based on the findings of this study, it is desirable to provide ongoing support for fathers. Furthermore, parents with infants and young children should receive support focused on interventions to alleviate parental stress and challenges.

Key words: Young children, fathers, child maltreatment, COVID-19

Presented by Medical*Online